

スポーツ継続要因と大学部活動生の実態

～スポーツにおける社会化理論を用いて～

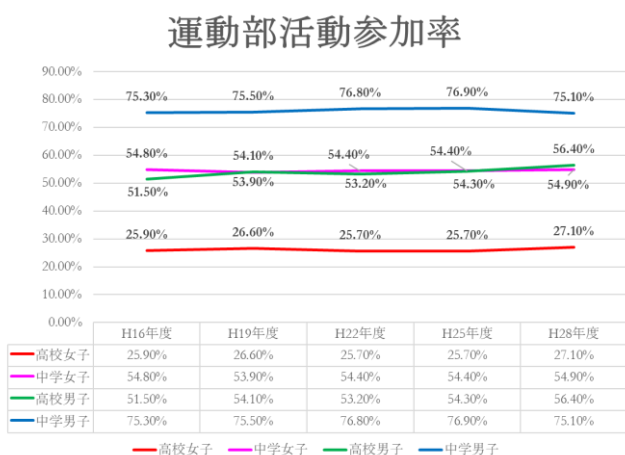
1210443 國分 祐希

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 背景

日本における、若者のスポーツ活動は、教育機関である小学校、中学校、高等学校の運動部活動を中心に展開されている。これは、日本独特の文化であり、教育機関を中心に活発に行われている国は日本以外にはないとされている。だが、この教育機関を中心とする日本のスポーツ振興システムは、数多くの問題を抱えており、その結果、スポーツから離脱していく若者が多く存在するという現状がある。

図1 運動部活動参加率



出所：スポーツ庁 HP 運動部活動の現状について

図1を見ると、中学校男子が最も部活参加率が高く、高等学校女子が最も低いことが分かる。中学校と高等学校の参加率を比較すると、男子、女子ともに大幅に参加率が減少していることが分かる。つまり、中学校で部活動に加入しスポーツ活動を開始した「スポーツ実施者」は、高等学校に入ると何らかの理由でスポーツから離れてしまうという「スポーツ離脱」が起こっている。この現象は、中学校から高等学校だけに限らず、小学校から中学校、高等学校、大学といった各スパンの間で起こっている。ライフステージが上がっていくにつれ、徐々にスポーツ実施者は減少しているのだ。

私はこのような状況が非常にもったいないことであると感じている。私は小学校2年生の時に地域のスポーツ少年団に入団し、中

学校、高等学校、大学を卒業するまで約14年間野球をやってきた。野球に限らず、スポーツはその競技の技術や知識の向上だけでなく、社会的規範や協調性、忍耐力、自尊心など、我々が生きていくなかで必要なスキルを養うことができるものである。私自身も野球を通じて得たものは、野球の技術や知識もさることながら、礼儀作法や協調性・リーダーシップなどこれから生きていくなかで必要なスキルのほうが多いと感じている。私自身の体験も踏まえて、スポーツは若者の成長に必要なものだと考えているし、それは小学校は小学校、中学校は中学校、各ステージにおいて様々なスキルを獲得できるものである。

本論では、各教育段階におけるスポーツ継続に影響を与えているものは何かについて、スポーツの社会化理論という考え方をを用いて、私自身が取り組んできた野球に着目して、各教育段階におけるスポーツの参与要因・継続要因について明らかにし、スポーツ離脱を防ぐ仕組みを考察していきたい。

2. 目的

背景でも説明したが、この研究を行うことで、各教育段階におけるスポーツ継続に影響を与えているものは何か、具体的には各教育段階におけるスポーツの参与要因・継続要因について明らかにし、スポーツ離脱を防ぐ仕組みを考察する。

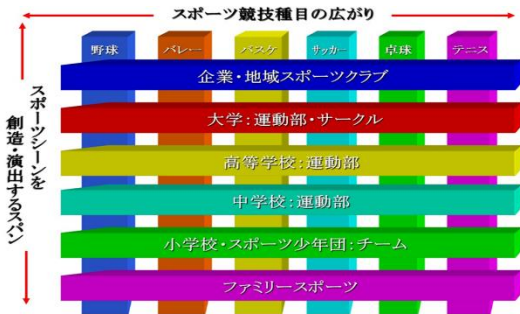
3. 研究方法

スポーツの参加要因と継続要因については、太田・柳澤(2002)「スポーツにおける社会化要因の検討—競技スポーツ参与に及ぼす他社と活動継続要因について—」、他の先行研究にあるスポーツの社会化理論という考え方をを用いる。そして、この研究は事例として野球に着目するため、高知工科大学硬式野球部にアンケート調査を行い、集計した結果を用いて考察する。具体的には、スポーツ参与に重要な他者の存在と各教育機関での継続要因

について数名にヒアリング調査を行う。

4. 日本のスポーツ振興の実態

図2 スポーツライフを形づくる種目と活動場面の関係



出所：原田宗彦、2011、76頁より筆者作成

上の図は、我々のスポーツライフを形づくる種目と活動場面の関係に示したものである。横軸のスポーツ競技種目については、メディア等でさまざまなスポーツが紹介され、新しいスポーツも普及されることにより、我々がスポーツをする際の選択肢は広がっている。しかしその一方で、縦軸のスポーツに参加する場面は、一般的に、ファミリースポーツに始まり、スポーツ少年団、小学校、中学校、高等学校、大学といった教育期間内での運動部やサークル、そして企業や地域のクラブやチームに所属する期間によって区切られ、入部（入会）と退部（退会）を繰り返していく。

つまり、スポーツに親しむ機会や活動を行う場が増えているにもかかわらず、連続性や継続性に対する配慮や仕掛けがなく、活動は一時的かつ分断化されているのだ。たとえば野球では、中学から高校、高校から大学にかけては、夏の大会終了時に引退して、後輩たちの新チームに移行する。3年生は進路決定のために運動そのものが遠ざかってしまいがちである。そして入学と同時に1年生から“リスタート”する。

このような数か月のブランクが生じる仕組みがスポーツ離脱の大きな原因となっている。実際に私の経験談も踏まえると、確かにその教育機関の間で所属していたスポーツをやめる、退部する人より教育機関を卒業し、次の教育機関に進むその一時的ないわゆるキャズムでスポーツを続けない選択をする人の方が圧倒的に多かった。

5. バーンアウト（燃え尽き症候群）

また、このような入部・卒部を繰り返すシステムにより、一つのスパンごとに短期的に成果や結果が求められることによる、バーンアウト（燃え尽き症候群）や怪我などのスポーツ障害も懸念されることが問題である。

バーンアウトとは、「仕事本位で、仕事以外に私生活の満足、楽しみをもつことができないパーソナリティーの持ち主が仕事上挫折して、それまでの精力的な仕事ぶりから、急速に無気力状態やうつ状態に陥る」[小此木、1985b : 188] 場合をいう。バーンアウト症候群は陥るまでのプロセスがある。それは〈競技への熱中→競技成績の停滞・低下→競技への固執→消耗〉という流れで表現できる。私自身、この研究に取り組むまでバーンアウトという言葉は知らなかった。しかし、今になり思い返せば、あの時の友人はバーンアウトに陥っていたのだらうと思う節がいくつか思い返すことができる。

バーンアウトの中でも野球というスポーツで多く見られる要因は、部活動の卒部や挫折、指導者の厳しい働きかけなどが挙げられるが、最も大きな要因は指導者にあると考える。指導者による厳しい指導に対して、負けたくない、見返してやるといった感情で練習に没頭し、その指導者に認められることで満足感を得る選手や同じく厳しい指導によって、自尊心を失くし、どれだけ頑張っても認められず、不満を抱き、向上心を投げ出す選手もいる。他にも厳しい指導によって様々な選手が存在するが、いずれにせよ指導者の影響を受け、選手の行動、感情が左右される場合がほとんどだ。このようにバーンアウトになる選手には指導者に対する依存心が特に強いと考えられたため、指導者の役割・在り方が重要で、スポーツ離脱を防ぐ「重要な他者」と考えられる。

6. スポーツにおける社会化理論

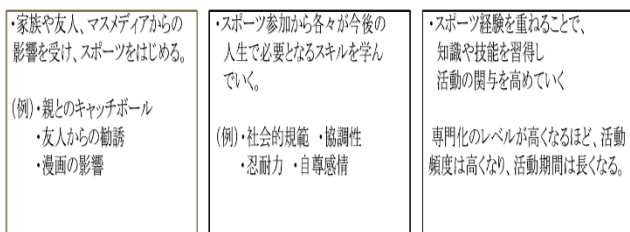
太田・柳澤らの先行研究によれば、スポーツ参加者は、日々のスポーツ活動を通して、「スポーツへ社会化されている」状態であるといわれている。いわゆる社会化（Socialization）とは、社会性の獲得を意味しており、自我の発達のような他社との関係、すなわち相互行為を通じて価値規範の内面化を意味し、その社会や集団に適合的な行動のパターンを発達させる過程である。よってスポーツに

における社会化理論とは個人が他社との相互作用を通してスポーツの社会に適応するための態度や行動を学習する過程のことである。

スポーツにおける社会化理論では、個人がスポーツ役割を学習するまでの過程を、「スポーツへの社会化」「スポーツによる社会化」「スポーツの専門化」の3つの段階を経ると説明されている（原田宗彦、2011、96頁）。その3つの段階を下図のようにまとめた。

図3 スポーツの社会化と専門化の概念モデル

スポーツへの社会化 ➡ スポーツによる社会化 ➡ スポーツの専門化



出所：出所： 原田宗彦、2011、97頁をもとに作成

まず、スポーツへの社会化は、個人がスポーツに関与するまでの過程である(住田他、2009)。スポーツへの社会化に影響を与える要因として、「個人的属性」(性、年齢、婚姻、職業、余暇時間、体力、スポーツ技能、価値観など)、「重要な他者」(親、きょうだい、友人、隣人、教師、コーチなど)、「社会的状況」(文化的状況、環境条件、生活場面など)の3つが報告されている。この過程を私の経験にあてはめて説明すると、父(重要な他者)が読売ジャイアンツファンで私が幼少期(個人的属性)の頃からテレビ中継を見ていた。次第に野球に興味を持つようになり、母の友人の息子が所属する隣のスポーツ少年団(社会的状況)に入団した。このように私だけでなく、一個人がスポーツへの社会化される際には3つの要因が必ず関与してくるものだと考えられる。

次に、スポーツによる社会化である。ここではスポーツに参加するようになった個人が置かれている役割を取得していき、その環境や他者の影響によって価値観や社会規範を学んでいく段階である。スポーツを通してスポーツマンシップや社会的規範、協調性、忍耐力、というような性格形成や社会性の発達が期待される。この過程が他の2つの過程よりスポーツの素晴らしさ、魅力が溢れている段階だと思っている。私の今日の性格、価値観、人間性が形成されてきた中で間違いなく野球というスポーツへの参与はなくてはならないものだと断言できる。本論の背景でも述べたが、私は野球とい

うスポーツへの参与で生きていく中で必要なスキルがおのずと身についたと自負している。その要因として考えられるのはスポーツに参与することで出会う多くの重要な他者だ。

最後に、スポーツの専門家である。役割を学習した個人がスポーツ経験を重ねることで、技術や知識を習得し、活動への関与を高めている段階である。このスポーツの専門化は、スポーツに対する意欲がとても強い段階で、専門化のレベルが高くなるほど、自らスポーツを行う頻度が高くなり、継続期間は長くなる傾向があると言われている。スポーツへの専門化は、バーンアウトなどを引き起こすという問題もあり、スポーツ離脱のひとつの要因になることもある。しかし、スポーツへの社会化の部分がしっかりと土台としてなされていれば、種目を変えたりなどの競技の離脱はあるかもしれないが、スポーツそのものからの離脱は防げるのではないだろうか。

7. アンケート結果

今回のアンケートは高知工科大学野球部員を対象に行った。今までのスポーツ(野球)参与の理由や継続の理由、バーンアウトの有無など1人1人のスポーツ履歴を調査してまとめた。

① スポーツ(野球)参与について

最初はスポーツ(野球)への社会化の過程についてまとめた。

表-1 スポーツ(野球)参与に関わった重要な他者(重複回答)

友人	13人(34.2%)
父	7人(18.4%)
兄	5人(13.1%)
アニメ	4人(10.5%)
テレビ	4人(10.5%)
指導者	2人(5.2%)
叔父	1人(2.6%)
その他	2人(5.2%)

表-1は今回のアンケートの間1の「あなたが野球をはじめたきっかけと時期を教えてください。」の集計結果である。表-1から分かるようにやはりスポーツ参与の際に「重要な他者」の影響を受けていることが分かった。また、表でまとめていないが、スポーツ参与は9割の人が小学生の時期だということが分かった。

② スポーツ（野球）履歴での継続をやめようと思った時期

図-2 スポーツ履歴での継続をやめようと思った時期と原因

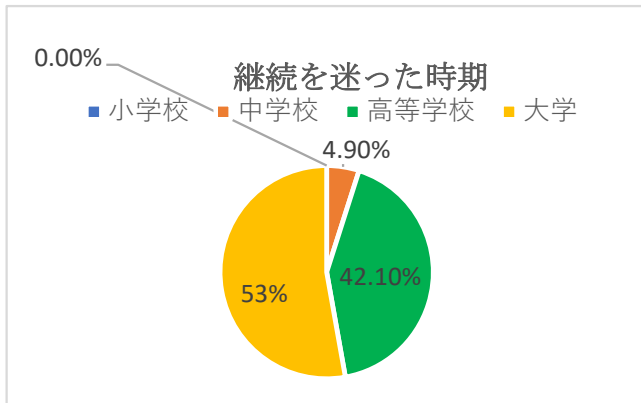


図-2は、アンケート回答者のスポーツ履歴での継続をやめようと思った時期と原因を調査したものである。この図からも分かるように、高等学校と大学時に多い。要因として、「高校野球でやりきったから」、「高校野球中に怪我でやる気がなくなったから」、「指導者との関係が悪く、嫌いだったから」のような理由がより多く見られた。これは彼らの高校が甲子園出場を目指し、ハードな猛練習や指導を行っていることが原因だと考える。

次に、「高校野球との違い」、「楽しくない」という理由が多かった。ここでの「高校野球との違い」とは何なのか？それは大学野球の特徴に原因があると考えられる。全ての大学に当てはまるわけではないが、高校野球までと比べて、大学野球は自主性が求められる。そのため「やらされる野球」ではなく、「考える野球」が大学野球の特徴である。しかし、であれば「高校野球との違い」が継続離脱要因にはならない。「やらされる野球」を好む選手はそういないだろう。では何故か？これこそまさにバーンアウトになる選手が指導者からの評価で達成感を得ていたと言えるのではないか。今までのような指導者からの指導に応え、得ていた満足感、達成感が大学野球では感じられなかったのだと考える。

③ 各教育機関における継続要因

次に各教育機関における継続要因を調査した。今回は小学校～中学校、中学校～高等学校、高等学校～大学の継続要因を分けて、調査し集計した。

・小学校から中学校への継続要因

表-3 小学校から中学校への継続要因（重複回答）

好きだから	17人
上手になりたいから	5人
選択肢がなかった	3人
続けてきたから	2人
友人が続けるから	2人
その他	9人

表-3は小学校から中学校の継続要因の集計結果である。小学校時は図-2からも分かるように継続を迷った人は少数だ。よって、表-3に関しては特に注目すべき点はないだろう。

・中学校から高等学校への継続要因

表-4 中学校から高等学校への継続要因（重複回答）

甲子園にでるため	14人
好きだから	12人
進学のため	4人
上手になりたいから	2人
続けてきたから	1人
友人が続けるから	1人
その他	3人

表-4は中学校から高等学校への継続要因の集計結果である。中学校時は図-2では継続を迷った人は少数である。図1の運動部活動参加率では中学校から高等学校への参加率は減少しているが、表-4の結果も併せて、野球というスポーツは「甲子園」という高校球児皆が目指す全国大会があることで参加率が減少していないことが予想される。とくにA0入試のある高知工科大学野球部ゆえ、高校時にある程度の成績を取めた部員がいることが、この数字の背景にあるかもしれない。また、「進学のため」という小学校から中学校での継続要因では見られなかった要因も出てきた。

・高等学校から大学への継続要因

表-5 高等学校から大学への継続要因（重複回答）

後悔・やり残したこと	13人
進学のため	6人
好きだから	6人
上手になりたいから	5人
友人が続けるから	2人
自身の力試し	2人
続けてきたから	1人
その他	3人

表-5は高等学校から大学の継続要因である。図-2では高等学校から大学時に継続を迷った人がほとんどだった。ここでは高校野球の時にやり残したことがあり、継続した人が多かった。また、進学のために継続した人が中学校から高等学校への継続要因のとき

よりも多く見られた。

④ 大学野球に求めること

表-6 大学野球に求めていること (重複回答)

高いレベル	11人
楽しさ	7人
自主性	7人
自由な環境	6人
人間形成	3人
良好な人間関係	1人
その他	3人

表-6では、大学まで続けてきた選手は何を思うのか? 大学野球というものに何を求めているのか? 最も多かったのが、「高いレベル」のある環境であった。継続要因で最も多かった。これは高校時代にやり残したことや後悔が残り、継続した選手の回答だと考

えられる。また、私が次に着目したのは、「自主性」と「人間形成」という2つの回答結果である。これらは回答者である高知工科大学現役野球部の選手が大学野球の「自主性」の重要性を理解し、それによって、野球だけでなく、自身の「人間性」の成長にも繋がると思っているからだと考えられる。

8. まとめ

これまで日本のスポーツ振興システムやスポーツにおける社会化理論、バーンアウト、実際に行ったアンケート、ヒアリングをもとに、若者のスポーツ(野球)における継続要因・参与要因をまとめてきた。上記までに述べたことを整理しながら、離脱防止の案や打開策を踏まえて、まとめに記していく。

まず、スポーツ(野球)への参与についてだが、小学生の時期に最も多く、身近な周囲の「重要な他者」の影響が大きいことが分かった。このことから参与の活性化には「重要な他者」のスポーツ(野球)の重視度、興味関心を高めていくことが有効だと考える。これから参与しようとしている個人だけでなく、「重要な他者」も一緒に体験入部に行ってみるのも一つの策ではないだろうか。参与に関わった「重要な他者」はその参加者が離脱の危機に陥ったときにも継続へと手を差し伸べてくれる存在になりうると考えられる。

次に高校時と大学時の継続をやめようと思ったことがあることに関して、まとめていきたい。

高校時は指導者の存在が与える影響が大きいことが分かった。高校時は「スポーツによる社会化」が進む大事な時期である。この時

期でしっかりと土台を作ることによって「スポーツの専門化」にスライドできると思われる。その中で大きい影響を与えている指導者は「重要な他者」であり、指導者次第で選手のスポーツ継続、離脱は左右されると言っても過言ではない。今日の高校野球は甲子園の影響もあり、勝利主義になりがちではあるが、選手のことを思い、理解した指導や次のステージへの架け橋になることが求められるのではないだろうか。それだけ高校時の指導者は選手の継続の鍵を握っている。

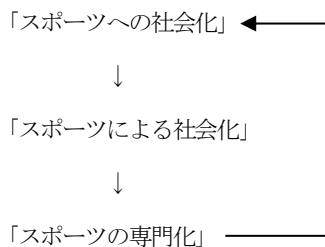
大学時は高校時とのギャップが要因となっていた。「やらされる野球」ではなく、「考える野球」になることで今までの達成感や満足感が得られなくなることや比較的自由になるのでチーム内でのモチベーションの違いに冷め、やる気がなくなることが要因である。これらに関しては先ほどの指導者次第で少しは改善できると考えている。これに加え、キャプテンを中心としたコミュニケーションのとれるチーム作りができれば、選手自身が大学野球の技術向上だけでなく、自身の人間形成を促せる素晴らしさに気づき、継続が続くのではないかと。

今回のアンケートは高知工科大学硬式野球部に協力していただいたもので、他大学の硬式野球部で同じアンケートを取れば、結果はいくらか違っていたであろう。アンケートの結果を見ても、高知工科大学硬式野球部の特色が随所に現れていると感じた。高いレベルを求めて入部してくる選手やある程度自由な環境を求める選手、楽しさを求める選手が多いことから、高知工科大学硬式野球部が野球を楽しみつつ、自分たちで考え、上のステージを目指すスタイルが再認識できた。もしかしたら、そのような高知工科大学野球部の特色をもっとホームページなどで情報発信してもいいのではないかとと思われる。つまり情報そのものが、「重要な他者」としての機能を発揮するかもしれないし、とくに遠方の高校生については効果的かもしれない。今回アンケート結果全てが全国のどの大学野球部にも共通することはないが、スポーツにおける社会化理論を踏まえると同等なことが言えると思っている。

9. おわりに

本論では、若者のスポーツ継続要因を野球に着目しながら、調査し、スポーツ離脱を防ぐ策を考察してきた。今回の研究で分かった

ことはスポーツに参加し、継続していくにあたって、良くも悪くも様々な「重要な他者」の影響を受けていることが分かった。もしこの影響が全て良い影響になったら、好循環が生まれ、スポーツ継続、人口は飛躍的に増加していきだろ。ここに至るまで何度も「重要な他者」の重要性を述べてきたが、ふと疑問に思ったことがある。「重要な他者」自身は自分がその人にとって、「重要な他者」になっていることに気づかないのではないか？「重要な他者」というのはその人本人が感じるものである。ではどうしたらよいのか？私はスポーツ（野球）を好きな人全員が周りを常に巻き込んでいけばいいと思う。指導者は各教育段階でスポーツ実施者が求めるものを理解することに努め、実施者は自分だけでなく、周りを巻き込みながら、「スポーツの専門化」へとレベルアップしていく。自分が常に誰かの「重要な他者」になり得ると思いながら、スポーツを楽しむことが大事なことだと思う。



本論で述べたことで、上図のようなサイクルが生まれ、スポーツ参加の増加、スポーツ離脱の防止への大きな足掛かりになることを期待して、本論を締めたい。

10. 謝辞

本研究を進めるにあたり担当教員である生島淳先生、馬淵泰先生をはじめアンケート、ヒアリング調査を快諾してくださった高知工科大学硬式野球部の皆様からの多大なご協力を頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

11. 参考文献

- ・住田健・藤本淳也・祐未ひとみ(2009) 「高校生の運動・スポーツ活動の実施および継続に関する研究」『大阪体育大学紀要』第5号。
- ・原田宗彦編著(2011)『スポーツ産業論 第5版』杏林書院。
- ・原田宗彦編著(2015)『スポーツ産業論 第6版』杏林書院。

- ・山本順之(2012)『「スポーツによる社会化」に関する社会学的研究：重要な他者の影響について』『九州国際大学教養研究』19(1)。
- ・太田雅夫・柳澤裕哉(2002)「スポーツにおける社会化要因の検討—競技スポーツ参加に及ぼす他社と活動継続要因について—」『天理大学学報』第203号。
- ・吉田毅(1994)「スポーツ的社会化からみたバーンアウト競技者の変容過程」『スポーツ社会学研究』1994年2巻
- ・文部科学省ホームページ スポーツ庁 (2017年5月)
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/17/1386194_02.pdf
- ・スポーツ健康科学部ブログ あいコアの星 立命館大学
www.ritsumeit.ac.jp/page.jsp?id=120821&date=2010-09-0